

連	載	
講	座	
第	3	回

黄門様と俳聖の水道工事・

徳川光圀と松尾芭蕉

作家 堂 門 冬 二

東京都文京区関口という地域に「関口芭蕉庵」という遺跡がある。元禄の俳聖と呼ばれた松尾芭蕉が住んでいた家の跡だ。この近くに「神田上水取水口大洗堰跡」というのがあり説明板が立っている。これによると、江戸時代の上水はここに築かれた堰で水量を上げて、水道通りの水路に流される。そして小石川の後楽園で有名な水戸藩の江戸藩邸を抜けて、暗渠に入り水道橋を渡って神田方面に送水された、とある。そして、

「この工事には、松尾芭蕉も参加したらしい」

と伝えられる。事実だとすれば非常に興味深い。というのは、この説明板にある上水の通り道として、「小石川の江戸藩邸を抜けて」というのは、実をいえば黄門の別称で有名な徳川光圀が工事を施したものである。徳川光圀は水戸の第二代目藩主だ。黄門と呼ばれたのは、古代中国の唐という国で中納言のポストが別称黄門と呼ばれていた。御三家のひとつである水戸徳川家は、代々中納言のポストを得た。そのために「黄門様」と呼ばれた。したがって、黄門様は光圀だけではない。中納言という位を持つ公家や大名はすべて黄門様になる。しかし光圀だけが特別に有名になったのは、やはり明治年間から流行り出した『水戸黄門漫遊記』のせいだろう。ああいう事実はまったくない。というのはこの光圀が「天下の副将軍」と呼ばれたように、常に江戸城にいて五代將軍徳川綱吉の補佐をしなければならなかったからである。かれが水戸藩主になったのちも、在任中水戸に帰られたのはわずか一回か二回だったといわれる。したがって、公務を放り出して日本中歩きまわるなどということは絶対にあり得ない。あくまでもフィクションである。

その光圀が三十歳のときに、有名な「明暦の大火」に出会った。水戸藩邸も被害を受けた。

この年かれは駒込の中屋敷に『大日本史』を編さんする史局を設けた。大日本史の編さんには、正確な資料や古文書を使用するので光圀が何よりも心配したのは、

「また江戸に大火が起って、これらの貴重な資料が焼けるようなことがあったら非常に困る」ということであつた。そこでかれは明暦の大火の苦い経験に基づき、

「江戸の水戸藩邸に、消火用水をたっぷりと保有したい」

という願いを持った。このことを幕府に願い出た。御三家のことなので幕府も許可をした。そこで、江戸市民の飲み水であつた神田上水の一部を水戸藩邸を通るような分流を許可した。光圀はこの分流工事に熱意を示し、自分もたびたび工事に立ち会つた。そして、

「ただ消火用水として水を保有するのはもったいない。庭の池にも流さそう」

と考えた。分流はいったん藩邸に流れこみ池を通じて再び流れ出るという流路をつくった。

そして、この工事に参加していたのがのちの俳聖松尾芭蕉だという。若いころの芭蕉はまだ俳句の俳名がそれほど有名ではないので、やはり働いて生計費を得ていた。芭蕉にどれだけの工事技術があったのかはわからない。ただかれの生国は伊賀国(三重県)上野なので、ここは例の伊賀忍者のふるさとだ。忍者というのは単に忍術を使うだけではなく、情報収集と同時に生活に密着したいろいろな技術を持っていた。したがって伊賀国の国主であった藤堂家に仕えていた芭蕉には、そんな技術や知識があったのかもしれない。あるいは単なる

“口雇い労働者”として参加していたのだろうか。歴史に“もしも”はない。しかしもしもこのとき、光圀と芭蕉が互いを知り合って、話をするようなことがあった歴史的事実があればこんな面白いことはない。黄門漫遊記よりもよほど興味深い。芭蕉が関口に住んでいたのは延宝五(1677)年から約四年間だったという。かれが住んでいたのは当時“水番屋”と呼ばれる粗末な小屋風の家屋だったという。しかし水番屋という以上、おそらくここにある堰から配水の計画を立てたり、水を流したりする役割を負っていただろうから、芭蕉が若いころはかなり江戸の上水道にかかわりを持っていたことは確かだ。

徳川光圀の父頼房は寛文一(1661)年七月に死んだ。光圀は二代目の藩主になった。しかしすぐには水戸にいかなかった。かれの時代にもまだ、水戸城を中心とする領国(常陸国・茨城県)には、旧領主佐竹家の名残が非常に色濃く残っていたからである。佐竹家は関ヶ原の合戦のときに曖昧な態度を取ったため、徳川家康に憎まれて遠く秋田に転勤させられた。

石高も半分以下に減らされた。そのために秋田にいける家臣や商人は少なく、半分以上が常陸国に残留した。残留した旧佐竹家の武士や民は徳川家を恨んだ。したがってその一門である水戸徳川家が入国したことに決してよい感情を持っていない。いつも、

「帰れ徳川、出ていけ徳川」

というシュプレヒコールを心の中であげていた。この反徳川感情は、初代の頼房だけでは処理できなかった。二代目光圀のときにもまだまだ残存していた。光圀は考えた。

(わたしが水戸城へ入る前に、常陸領民のきもちを和らげる必要がある。それには何をすればよいか?)

ということだ。情報を集めてみると水戸の城下町にはよい上水がないという。粗末な水道があるが雨になれば濁って飲めない。地下水も質が悪い。光圀は過去の経験から、

「よい飲み水を提供することが、反徳川感情を和らげることになるだろう」

と思いついた。そこでこの方面に明るい部下に命じ、

「わたしが入国する前に、水戸の城下町に良質の上水を提供する水道をつくっておけ」

と命じた。命じられた部下は水戸へとび、近くでよい水を湧かせる水源を探し歩いた。やがて笠原の森というところで良質の湧水を発見した。工事が開始された。水路の全長は約十キロメートルである。斜面を利用して水が流れるようにした。工期はわずか一年足らずであった。上水道敷設を命ぜられた部下も、

「殿がご入国前に、なんとかしてこの水道を完成させたい」

と意欲に燃えていた。工事開始は寛文二(1662)年で、翌三年の七月下旬に完成した。この報告を受けた光圀はよろこび、翌三年七月二日にはじめて入国した。いままで反徳川感情で凝り固まっていた水戸の城下町市民たちが、水道をつくってくれた新しい殿様に歓迎の声をあげたのはいうまでもない。